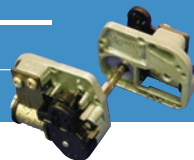


体感する美術—サウンドアートから—

2010年10月23日・24日 / 11月6日・7日 / 11月20日・21日 埼玉県立近代美術館



松本秋則「音のある風景」

「サウンドアート」とは何でしょう？それは「音」を主な制作素材とする現代美術の一分野であり、もとをたどれば音楽から派生したものもあります。曲の演奏というよりは、その場の環境も含めて音の鳴る仕組みを体感するのが一つの特徴です。20世紀以降、次々と新しい表現が生みだされ、絵画や彫刻以外の領域へ拡大していった美術には、視覚の対象にとどまらないものも数多くあります。今回の〈SMFアート楽座〉では、3組4人のアーティストによる作品展示とアーティストトーク、ワークショップが全3回のリレー方式でおこなわれました。美術館の講堂がそれぞれの手法でつくり変えられ、見て聞いて触れて体感する音の空間となりました。

藤本由紀夫「HERE & THERE ~見るごとと聞くごと~」

10月23日・24日 講堂



日常的な既製品を組み合わせ、日常のひとまわり外へと聞く人の感覚を広げる藤本由紀夫さんの「サウンドオブジェ」。処女作を含む17種類が、美術館の椅子のコレクションとコラボレートしました。オルゴールの長く伸びた巻きネジが、ガラスに入ったビー玉をゆっくりかき混ぜる「BROOM」は、見た目も音も透きとおった作品です。可憐な、時に危うくひび割れる「星に願いを」のメロディー。ガラスの反響、ビー玉の擦れ合い、ガラスの展示台の共鳴が重なって響きが変わってゆくので

す。ネジの巻き方と物理現象で二度と同じ音の鳴らないオルゴールのシリーズは、その繊細な魅力で多くの来場者をひきつけました。作品にさわるのを初めは躊躇するものの、大人も子どももコツをつかんだところから徐々にのめりこんでいく様子。音階の他、サイコロや木の実などの小さな音を聞きとる集中力が引きだされ、見慣れたはずのものの特徴が、用途ではない音響の視点からいきいきと見えてくるのです。更にそれらの音が途絶えた瞬間、耳に届くのは、今まで意識しなかった空調や蛍光灯のかすかな唸り。聞こえる音が眼の前から空間へと広がっていき、当たり前のように不思議な体験を長い時間楽しむ家族連れも見られました。

展示から受け取る理解は人それぞれ。しかしその中で、重要なメッセージもつがゆえに一見不可解な作品がひとつありました。この回のテーマにもなっている作品「HERE & THERE」は2枚の透明板の手前に刻まれた「HERE」が、奥の「T」と重なって「THERE」となるシンプルなつくりですが、作者の藤本さんは「THERE」「HERE」を「見ること」「聞くごと」と訳します。なぜでしょうか。それは、ものを「見ること」が対象とある程度の距離と客観性をともなうのに対して、音を「聞くごと」は体の内部に直接起こる個別な感覚だから。私たちが眼にするのは「THERE=そこ」、そして耳にするのは「HERE=ここ」。同じ場所を体感しているつもりでも実は物理的・心理的な隔りがあるのです。また一方で、ものの材質や中身など、見た目ではつかない判断を音が補うことを思えば、文字通り「THERE=見ること」は「HERE=聞くごと」を含むともいえます。日頃ほとんど意識されない「見ること」と

「聞くごと」の微妙な差異と相対関係について、藤本さんが実体験を交えて話す2時間のアーティストトークは新鮮で興味深く、その後即興で始めた展示作品1点1点についての丁寧な解説とともに来場者の感想が多数寄せられました。「おもしろかった！」と満足げな表情で会場をあとにする方々に、早くも企画への手応えを感じたのでした。

松本秋則「音のある風景」

11月6日・7日 講堂・創作室



手づくりの「竹のサウンドオブジェ」で多彩な音色を響かせる松本秋則さん。2008年には人情あふれる商店街で、2009年には公園の緑の中で人々の暮らしかき渡る風と交じり合う音の風景を生み出しましたが、今回は一転して外界から遮断された部屋の中。そのせいでしょうか、これまでとは雰囲気違います。扉から漏れる音にひかれて一歩入れば、10点の竹のリングが薄明かりに浮かびあがります。リングの下にも竹製の仕掛けが吊り下げられ、ゆったりとした回転とともに床に並んだもの—ガラスや陶磁器、金属ボウル、拾った石などを叩く仕組みです。不規則に鳴り響く澄んだ音色は水琴窟やガムランのようで、会場端のステージに腰掛け、じっと聞き入る来場者の姿が目立ちました。知らない者同士が身を寄せ合って並ぶさまは古寺の縁側を思わせ、石の庭に宇宙を見るように、神秘的な「音のある風景」を見つめる眼も、どこか遠くの次元を旅しているようです。他にも、床にうつる影の動きにみとれる人、仕掛けの細部を見きわめようとする人、味わい方はそれぞれですが、会場中央で乳母車に乗った赤ちゃんとお母さんがずっと楽しそうに過ごしている様子が特に印象に残りました。

心静まる音色を奏でた「竹のサウンドオブジェ」ですが、その神髄は驚くほどのバリ



ーションの豊かさにあります。親子対象のワークショップでは、独創的な楽器の数々を講師の松本さんが自ら身につけ、パフォーマンスで紹介していきましました。予測のつかない動きと音に、みるみる広がる参加者の笑顔。大人も子どもうれしそうに手にとって夢中で鳴らしていました。そんな賑やかなイントロダクションを経て制作するのは、ユーモラスなダンボールの笛です。刃物を使う場面では親が奮闘、子どもたちは竹筒の切り口に合わせてフィルムの弁を貼りつけます。吹くと思いがけず大きな音！これだけで笛になる不思議さを楽しんでいました。さらに、それをダンボールに差しこんで箱を押せば迫力ある低音に変わります。完成後は全員の大合奏でしめくり、親子で力を合わせた成果を高らかに響きわたらせました。参加者にとって、竹を使った楽器作りは予想以上に手軽で新鮮だったようです。アーティストと身近にやりとりをしながら表現の世界に親しみ、充実した時間となりました。

三友周太+河村陽介「音の部屋」

11月20日・21日 講堂・創作室



企画の最終回を飾るのは三友周太さんと河村陽介さん。2009年に展示した「音の箱」は商店街の音を集めて聞く糸電話ボックスでしたが、今回は広い美術館の講堂を無数の糸で震わせるダイナミックな「音の部屋」です。大きく束ねられた糸の一端は振

動体として用いた小型マッサージ器に接しており、もう一端は目玉クリップで天井の梁へ繋がります。振動が糸を伝わってはいあがり、天井と共鳴し、部屋全体を鳴らす仕組みです。さらに壁際を一周して糸電話スピーカーが取り囲んでいます。それぞれにマイクロバイブレーターが付けられてあり、紙コップに耳を寄せれば、ひとつひとつ微妙に異なるパイプ音。それらが高周波から低周波として交じり合い、大きな音の塊となって部屋に立つ人の全身を包みます。ブラックライトで濃紺に沈む視界一面、蛍光の赤い糸がレーザーのように放射して光ります。この一見近未来的な巨大空間音響装置がアナログな糸電話の原理でつくられていることに、また「草刈り機やエアコン室外機のような騒音」（アンケートより）が微細な糸の振動から発せられていることに来場者は驚いていました。

懐かしいイメージとはかけ離れた糸電話の異空間。単純な音の原理からも工夫次第で無限の響きが生まれます。これを身近な素材で体験するワークショップでは、親子がペアを組み、紙コップと糸にとどまらない新しい電話作りに挑戦しました。ふくらませた風船を受話器にすると内側に声がかどまし、枠に張ったアルミホイルでは変声機のようなビブラートがかかります。連結させた輪ゴムやクリップが電話線になり、園芸用の竿ではよりはっきりと声が伝わります。いろいろな組み合わせを試すうち、講師の三友さん・河村さんも制作に没頭して、その場にいる全員が対等な発明家同士となり、刺激を受け合っています。その後、披露された作品はどれも個性が光る力作ぞろいでした。アイデア交換しながら何度も声を交わすことで



親子の仲も深まった様子。電話線をつなぎ合わせて大人数で通話するなど、参加者の間に多様なコミュニケーションと連帯感が生まれていきました。こうして楽しむ音がものや空気を伝わる振動であることを実感すれば、自分の体を通して心にまで響くのもうなずけます。音のワークショップを通じて人とも・人と人がつながる親密な空間が生まれたように、聴覚は視覚よりも深く人と世界を結びつけるのかもしれない。

以上3回を振り返れば三者三様、「サウンドアート」という共通の分野から、まるで雰囲気異なる音の世界が生まれました。けれども、ありふれた日用品を素材に、ごく原始的な音響の仕組みを利用している点は同じです。「音というものの自由さを感じることができた」とは来場者の声。種類も質もさまざまに、目に見える範囲を越えて響き渡る音は、物事をより広くとらえる手がかりになるといえます。作品をきっかけに耳を澄ましてみることで、初めて見えてくる「人」「もの」「場所」の関係。その体験は、誰にでも分かりやすく開かれたものでありながら奥深く豊かです。受付での呼び込みに対して、さほど乗り気ではなかった来場者が、体験後は「やあ良かった！声をかけてくれてありがとう」と笑顔に。そのうちの数人が常連となって何度も来てくださったり、外国の方々からも好反応をいただいたりして開催中にはさまざまな、うれしい出会いがありました。言葉を越え、五感を通じて人の心が響き合う、美術の力を改めて感じた6日間でした。

さて、「人間は地球という巨大なレコード盤をかき鳴らす針である」という、藤本由紀夫さんの発想を借りれば、地球を歩き、大気をふるわせながら人が生きていく、そのこと自体を「サウンド」と呼べるのではないのでしょうか。大きな産声で誕生を告げ、その命の幕が降りるとき、最後に残るのは聴覚だといわれていますが、人とものが交差し、織りなす世界の上で私たちは、どんな音を聞き、奏でていくことができるのでしょうか。

小野寺茜(SMF事務局)